日本唯識における論義に関する一考察

——「若論顯理」を中心として——

後 藤 康 夫

日本における唯識教学の展開は、中国唐代の玄奘三蔵(六〇二〜六六四)による新たな翻訳以降、その法脈の慈恩大師基(六三三〜六八二)・淄洲大師慧沼(六四八〜七一三)・撰揚大師智周(六六八〜七二三)の三祖を承けた伝来に始まることは言うまでもない。南都の南北両寺に伝わった唯識教学は、三祖の定判に基づきながらもやがて独自の展開をすることとなる。その一つが平安期から作成され初め鎌倉期・室町期にかけて数多く作成された短釈と呼ばれる論義の出現である。これは護法正義に立つ玄奘訳出の『成唯識論』(成論)と略称)等に基つき本文等を各論題として一つ一つ取り出し問答形式で解釈してゆくもので、往々にして南北両寺伝を超えて解釈の相違をもたらし以後の教義展開を複雑にさせている、また成立背景の一つには講会等々の論義の場に関わつて教学研究のため制作されたものである。現在大部のものでは、菩提院蔵俊(一一〇四〜一一八〇)の『菩提院抄』、解脱房貞慶(一一五五〜一二二三)の『尋思鈔』『尋思鈔別要』、聖覚房(正学房)良

算編纂の『同学鈔』、知足院英弘の『知足抄』等の論義の抄、及び資料集としての『本文抄』が存しており、小部のものでは多くの学僧の手になる短釈類が残されている。現在では少数ながらも専門分野を異にする研究者達によつて研究が始められており、既に幾つかの研究成果も出てきている。また現時点では幾つかの大学図書館をはじめとして南都の法相系各寺や地方寺院に残されていることが確認されており、その数量も膨大であることが判明している。今日、唯識教学展開の一端を探る意図からも従来看過されてきたこの短釈類を考察対象に取り上げる必要が存するわけである。ましてや論義が法相宗だけのものではなく広く他宗にも見られることから論義研究の必要性は高いと言えるであろう。よつて本稿では、唯識教学の展開の上からも重要な数多の短釈類のうち、定判を踏まえて細釈しているものとして真理を顯証する場合何によるべきか問題とする「若論顯理」という論義を取り上げて聊か考察を加えるための緒とする所存である。

さて、この論義題目は『成論』造論意趣を解釈した慈恩基の『述記』を踏まえて積した智周の『演秘』に出てくる文言⁽³⁾によっており、無漏智品が真理を証する場合に有観によるべきか否かを発端とするものである。既に鎌倉初期の貞慶の『尋思鈔』に五重唯識との関連で言及され、単独論義としては『同学鈔』に示され、以後それを論義の指南として幾つもの短釈が著されることとなる論義である。抑も『成論』巻頭には、論の制作意図を明らかにして護法等の各論師の見解が示され、正解を生じて煩惱障・所知障の二障や我法の二執を断じ真解脱と大菩提の二勝果を得させる「悟断得果」、我法の二空に達して唯識性を悟らせる「達空悟性」、外境は内識のように存するものであるとする執や諸識は用きは別々でも体は同じ等と執する種々の邪執を破折し唯識の道理を顕わす「破執顯理」の都合三解を立てている。『述記』によればそれぞれ順に安慧等、火弁等、護法等の解と積され、ここでは護法の解のみを採るわけでなく他の解をも肯定的に捉えている。この中で日本で注目されてくるものは初解である。初解とは「為_レ於_二二空_一有_レ迷謬_レ者生_レ正解_上故。……若証_二二空_一彼障隨断。断障為_レ得_二二勝果_一故」と言うように二空に迷・謬する者に対して正解を生じさせるとする解であるが、これを積して『述記』巻一では、正しく二空を了解させる点に関して「何謂_二二空_一。謂即生法。先云_二人我_一今説為_レ生。但説_二於人

日本唯識における論義に関する一考察(後藤)

我_レ不_レ該_レ余趣_レ故。彼皆執_レ有_レ。此説為_レ空。空即彼無。無_レ別体_レ也。智縁_レ空起。為_レ所由門。顯_二二真如_一名_二二空理_一。理体雖_レ有_レ離_レ空。非_レ性是空。説為_二二空_一。從_レ能顯_レ説。……是二空所顯実性。故言_レ空者從_レ能顯_レ説」と生空に加え法執に対する法空をも説く点を説示した後、この二空とは空そのものを指すと言うよりも二空所顯の理であると述すように「二空」という能顯側からの説明であることを示している。これを受けて智周は、『演秘』において更にその所顯の理に関して積を進めて、有執に対して空を説くことや空執に對して有と説くこと等の有空執と空有観の問題をも論じている。即ち、

問衆生執_レ有_レ。以_レ空為_レ門破病顯_レ理。衆生執_レ空。應_レ有_レ為_レ門遣_レ執明_レ理。答若破_レ空病_レ説_レ有_レ能除_レ。若論_レ顯_レ理要資_レ空觀。問有_レ觀有_レ相即不_レ顯_レ理。空相不_レ遣豈得_レ理耶。答由_レ二空_一為_レ門遣_レ能所取_レ。一。方泯_二二相_一而能証_レ理。從_レ所由門_一名_二二空顯_レ理。理亦無_レ失。

と、確かに空に迷う場合には有を説いて執を除くが能取所取の二相を遣り真理を顯証する場合には所由の観点より空観によるべきと積している。同法脈の如理も『義演』や『演秘釈』において細かな点は別として概ね同様に積している。理を証するにはあくまでも空によるとする捉え方は、当然日本唯識においても基本となるものであるが、この有観空観の關係等智周の見解を巡って聊か論議されることとなる。

日本唯識においてこの件が取り上げられ論議されてくるのは、『成論』等に基づく教義の考察を一論義ごとに行つていくようになる時期からと考えられるが、現存するものとしてはまず先述の鎌倉期の貞慶の『尋思鈔』が存する。その同書巻一の造論縁起段において、

問依_レ有観_二可_レ顯_一真理耶。答不_レ尔。付_レ之顯_一真理。要由_レ除障而有観_レ已除_レ執何不_レ顯_一真理耶。依_レ之撰大乘論中明_三性観門_一遍計空依_レ有_レ正証_一真理云云。此豈非_レ依_レ有_レ空観門_一同証_レ真理耶。未云。演秘依_レ教破_レ執修_レ観顯_レ理。前後淺深相待_レ之。是以_レ為_レ執_レ空之類_一可_レ說_一依_レ有_レ聞_レ之。除_レ空執_一所謂慈尊說五部論_一破_レ衆生空見_一等也。雖_レ観_二中道_一正猶_レ以_レ有_レ似_レ真也。若信_レ解中道_一了後自發_三三慧_一漸次修習之時將_レ入_レ理之方便_一以_レ空_レ為_レ本所_レ增加_レ行位尋思如_レ実智等也。設資糧中亦雖_レ緣_レ正性観_一正當_レ加行位_一。空観者不_レ必_レ單_レ空行解_一以_レ空_レ観功能_レ顯_レ証_レ真理。帶_レ相_レ有_レ所得之観_一不_レ能_レ証_レ理故_一設_レ其_レ有_レ所得_レ中_レ猶_レ前後位_レ相對_レ漸進漸悟_レ皆_レ前_レ空_レ観力_レ也_一為_レ言_一……と説いている。理を証する上で二障を滅除する必要があるため有_レ空_レ執を空_レ有_レ観によつて滅することを認めるものの一方空_レ観とは、加行位における尋思観如_レ実智_レ観を例に挙げ理に悟入するための観とし、更に単なる空の行解ではないと「單空_二（偏空）を否定して空_レ有_レ相を帯びない空_レ観によるべきことを示している。またたとえ未だ有_レ所得の位にあつても漸進漸悟でできることも空_レ観によると述べてその空_レ観を強調している。ここでは空_レ観が五重唯識の初重遣虚存_レ実識或いは第五重遣相証

性識のどれを指すのかという論議^①を展開させる上でまず論じられているためこれ以上の説述はないが、それでも空_レ執に対する有_レ観と対になる有_レ執に対する空_レ観と真理を顯証する空_レ観との区別を明示していると言えよう。換言すれば、理を顯証する空_レ観とは中道の観であることを示していると言えようか。これはやがて顯理の空_レ観や執破の有_レ空_レ對遣という短釈に連なるものである。

貞慶の『尋思鈔』撰述に深く関わつた弟子良算は自編の『同学鈔』において「若論顯理」という論題の下で少し論議しており、また資料集として『本文抄』^②が存する。管見ではあるが彼は当該論義について「転職頼耶」等の例と異なり別紙が残されていないため独自の見解は提示していないようである。しかしそれでも解釈を纏めて示しその意味では後世の論義よりすれば指南となる論義であろう。さてその論義とは既述の通り無漏智が真理を顯証しようとする場合に有_レ観によるのかを發問とするが、彼はこれについて宗家の所定（認められた見解）として有_レ観によつては真理を顯証できないことを明言している。これは先徳の解釈を踏まえた当然の解ではあるが、さらに迷謬の種々不同という難に対して次のように纏めて、

答誠如_レ疑難。破_三有_レ空_レ執_一必_レ依_レ空_レ有_レ観門_一。能治所治。其理必然故。判_レ遣_レ者_レ空_レ観對_レ破_レ有_レ執_一。存_レ者_レ有_レ観對_レ遣_レ空_レ執_一。今_レ観_二空_レ有_一而

遣_中有空_上。即此意也。但顯_二真理_一必由_二空觀_一。真理無相豈以_二有觀_一為_レ門耶。以_レ空為_レ門故。云_二空真如_一。述_レ謂要觀_レ彼遍計所執空_一為_レ門故。入_レ於_レ真性。深存_レ此旨也。此則智与_レ真如_一平等平等俱離_二能取所取_一故。住_二無所得心_一。親証_レ法性_一故。若有觀者。豈証_二無相理_一耶。……

と答えている。これは能治所治の観点から言えば有空執を空有観によつて遣破することを『義林章』卷一¹⁶を挙げて五重唯識の初重遣虚存実識に相当するとした上で、智が理を証する場合の理智の冥合や二空により顕わされる真如という点からも真理・法性を顕証できるのは空観に他ならず、有観によつては不可能と論じている。この教証として『広百論釈論』卷六や『演秘』卷一¹⁷を引用するが、特に前書の「有_レ有_レ等皆順_二執心_一。空_レ空空等皆違_二妄執_一。故有_レ智者聞_レ說_レ空言_一。応_レ離_二一切有_レ無_レ等執_一。悟_レ法真理非_レ有_レ非_レ無_一」¹⁸という所引からも知られるように、真理悟入について有観に対する空観の絶対的な優位性を指摘し結論付けている。この論義からは空観が理を顕証する点について明解に示している。つまりこの『同学鈔』の解を理を顕わす門として有空観を把捉していると言え、これがやがて諸門を立てて有空観を積すようになる。次いで講会の準備や教学研究のため小部の短釈が多く作成されてゆき、本論義も現存するもので二十余部程ある。現時点で未だ披見できない短釈を除くとしても、自らの義や厳寛

日本唯識における論義に関する一考察（後 藤）

法印の口伝その他の論義を集めた善実の短釈、十有余の問題を順次挙げる経実の短釈¹⁹、宝積院の文集や縁円の義を含む長胤の短釈、興基の案を短釈等々種々の短釈がある。この内注目しておいてよい短釈の一つに光胤（一三九六〜一四七八）のものが挙げられるであろう。彼は『唯識論問書』の談義書や短釈を著した室町期学僧の一人である。ただ『問書』に残されていないが、短釈に「凡断惑理証性相聖者聞証之観門²⁰」と述べるように当論義を重要な法門と見なしており都合三重の問答を行つてゐる。ただ初重のみ記載されていないが、第二重では『同学鈔』と同様の説明をしこれが真理を顕証する真理観門にあたるといっている。当時論義には「成申義勢執破頭理証知三重置義候²¹」と理を顕わす顕理門と理に冥合する証知門と有空執を遣る執破門（遣執門）の三門とが説かれており、第二重は顕理門で、第三重ではこれに関し空有について多岐に亘り説いている。今地前と地上とに分けて見てみるならば、

次於_二地前相似観_一見_レ顯理証知義門_一敷_レ事相似実証可_二相比_一謂候間其義談候。其顯理空觀証知有_レ觀候。就_レ此肝要顯理証知交前後候。抑遣虚存実時……何觀除トアキラメ候へハ有_レ無_レ一異等妄執悉空觀所除候。さ候時空觀顯理所由門ナルベケレト成申。講答大綱候。所詮_レ外顯_レ月道理ナキテ候。遣_レ執心_一外顯理方便アルマシキキ敷_レ存候……教益執破時有空對遣_二門アルテ候_一……三慧觀道入之時有空_二觀遮情表徳_一二門分候間空觀先遣_二一切妄執_一有_レ觀冥_一合理体_一

候。講答才学此分之³。

と説き、地前の相似の観では顕理の用は空観とし証知の用は有観と見て両者を区別し、妄執は空観によって除かれるためこれが顕理の所由門となると述べる等執着心を遣うことを顕理と捉えている。即ちここでの空観には証知の用はなく空観は妄執を遣う遮情の行相であつて、理に向かつて証知する有観との二観同時に遮表の二用を起す段階であり、またここは空有観によって有空執を遣う有空対遣の執破門ともされている。つまり三門と捉えている。このように有観の特色ある積や空観のはたらきを三門により遺漏のない積を示そうとしている。次に地上は、

観門位事。先所顕理地上実証真理候。付之顕理証知観定候時。顕理地前四善根観解。証知見道実証本智。先大綱定置候。但実証冥合位有「顕理空観」敷事有「子細」篇篇候就「其許」実証顕理「義」証知即顕理申候無故彼一義候へトモ亡二取「辺」顕理空観取義成申候。

……一地上実証位有「顕理証知二辺」文○事。答本智冥合俱離能取所取相。故説候間此位不見二取空観アル事分明候³。

と述べ、本来の所顕の理を地前ではなく地上実証の真理においている。この場合二門を見ると初地入見道のためには顕理を地前四善根観とし証知を見道実証の本智と見なし、入見道とは顕理して証知するという捉え方となる。しかし地上における実証位の段階となつては、顕理と証知の両者を認め実証

にて二取を離れる顕理の空観が存すると捉えている。つまり二門同時に立つて理を顕証する点を示していよう。以上この地前と地上と二つを分けて説示することによって従来の説き方を補つて明解に示そうとしていたことが読みとれよう。地前での理を顕わす顕理門と理に冥合する証知門との区別は遮表の空観有観各々の違いによるとし、有空執を空有観により対治する執破門を認め空有観の空観と理を顕わす空観との相違を説示することによって種々の空観のはたらきの重層性を説いている。更に地上ではその顕理と証知の並ぶ点を説き真理を顕証する空観を示している。上記に示す三重問答の中『同学鈔』解積を踏襲する解もあれば、顕理と証知を分ける等同書に見られない新たな解積が提示される解もあり、空観を巡る積を諸門によって構成している点に特徴が見られよう。唯識教学伝来後、『成論』等に基づく論義の考察が行われていくと一つ一つの教義を微に入り細に亘つて解積・会通し整合性を求める結果、中には重箱の角をつつく些末な論義もないわけではないが、一方で独特の教学展開を果たしているものも少なくない。今回取り上げた論義は、『成論』『述記』等から『演秘』に到る祖師の解積を踏まえて、五重唯識との関連や空有観と空観の問題で一定の働きをしている『尋思鈔』の解積、また理を顕わす空観に関する『同学鈔』の解積、更に光胤の短釈における見解等々からも知られるように、空観

を空有観の空観と理を顕証する観との二つをどのようになにに説き明かせるのかということ論じられてきたものが、顕理門・証知門・執破門等にこれを幾つにも分けて説くというように空有観を細釈していく展開をしているものである。この空有観解釈には両親に対する独特の見方があり、今回僅かな例ではあるが唯識教学を如何に論理的過失なく説き明かすかで様々に積されてきた日本唯識において論義の考察は教学展開を探る一助と言つても過言ではないであろう。

- 1 『菩提院鈔』『知足鈔』は卷六現存(仏全)。
- 2 『南都仏教』(未刊)の『法勝寺御八講問答記』論義に関する研究や龍大仏文研叢書VII『日本中世の唯識思想』等々参照。
- 3 大正四三・八一六上。
- 4 『成唯識論同学鈔』の研究(2)(龍大仏文研紀要37)参照。
- 5 大正三一・一上。
- 6 大正四三・二三四中。
- 7 大正三一・一上。
- 8 大正四三・二三四下。
- 9 大正四三・八一六上〜中。
- 10 『義演』卷一(正統蔵一・七九・一・八)、『演秘釈』卷一(同一・七九・五・四三五)。
- 11 『尋思鈔』卷一(龍大図書館蔵)。猶本文中の「所増加行位」は「所謂加行位」の誤字と考えられる。亦本書は善実(若論顯理)(業師寺蔵)等に一指南書として書名記載あり。
- 13 五重唯識への言及はやがて弁範(一二九五)の『五重略

日本唯識における論義に関する一考察(後藤)

問答』(唯識五重問答抄)において一つの展開を見ることとなる(拙稿『弁範』『五重略問答』における初重唯識に関する一考察)(仏教学研究43)参照。

14 「問依_二有観_一可_レ顯_三真理_二乎」(大正六五・四三六下〜四三七中)という論題で資料収録。亦作者は従來說かれてきた蔵俊よりも良算の可能性が高いと考えられつつある(註4参照)。

15 大正六六・六五中。

16 大正四五・二五八下。

17 『演秘』卷一(大正四三・八一六上)引用。

18 大正三〇・二一九下。

19 業師寺蔵。

20 谷大図書館蔵。

21 新たな研究は弥山札知「論義「許現起職」に対する光胤の理解について」(『日本仏教文化論叢』上巻所収)参照。亦「問書」等光胤については同氏論文参照。

22〜25 光胤「若論顯理」(業師寺蔵)。

(キーワード) 論義、短釈、若論顯理、顯理証知執破、空観
(龍谷大学非常勤講師)